

## 鏡花「藥草取」覚書

田 中 励 儀

泉鏡花にとって、明治三十六年は多難な年であった。最愛の人すゝとの同棲が発覚し、師尾崎紅葉によって仲を割かれたのが四月、その紅葉も十月には世を去っている。自筆年譜には、この年の作品として「藥草取」「白羽箭」「風流線」三作が記され、なかでも「藥草取」は、「換菓編」の一篇にして、同葉、皆ともに先生の病床に呈したるなり。先生、筆を枕に取りて、尚ほ章行の句読を正したまひたり」と思ひ出深く語られている。本稿では、「藥草取」をめぐる諸問題について、主に、成立過程を中心に論証していきたい。

### 一

「藥草取」は、「先生の病床に呈」するべく企画された『換菓編』第一作として執筆された。しかし、企画そのものは必ずしも順調に進行したとはいえない。まず、書誌的事項を追ってみよう。紅葉

鏡花「藥草取」覚書

は明治三十六年「三月三日大学病院に入院、胃癌と診断された」が、「同月十四日退院」<sup>①</sup>し、早速、作家活動を再開する。「十千万堂日録」<sup>②</sup>三月二十三日条に「十千万堂出版部の相談あり」の記述があり、二十五日には「本日午後一時より鏡花宅に十千万堂出版部に於ける第一編の作として門生集作の拳に就き相談会あり」と記されている。これが『換菓編』を企画する最初の集まりであつたらう。四月十四日から十六日にかけての鏡花・すゝ離別事件を挟んだ、五月十一日付「二六新報」にはこの企画を報じた「社告」が掲載される。

社員尾崎紅葉氏は目下病を護りて静養中なるが氏の門下に在りて誘掖の恩を荷へる文士十数氏相謀り多年の師恩に酬いんが為めに各々心血を濺ぎたる小説又は隨筆を作りて氏の牀下に奉<sup>デジケエ</sup>贈し名<sup>シノナ</sup>けて『換菓編』といふ（略）此奉贈文学が如何の内容を有せるか請ふ来る十五日以後の二六紙上に見よ

これに併せて、全十六作品の総目録が掲載されている。

予告より一日遅れた五月十六日から第一作泉鏡花「藁草取」が発表され、二十四日のみ休載し、三十日には無事完結している。六月一日から十五日までの、第二作徳田秋声「ゆく雲」も予定どおり進出したが、つづく第三作小栗風葉「手梛足桎」の連載は難行する。

この作品は、六月十六日に始まり七月十九日に完結するが、その間十八回も休載している。<sup>③</sup>連載期間中、半分以上休載というていたらくで、「十千万堂日録」七月四日条に「換菓篇の事にて風葉生を招く」とあるのも、あるいは風葉から事情を聴くためであったかもしれない。新聞社が風葉の遅筆に業を煮やしたのか、その後、第四作はなかなか掲載されず、八月二十二日になってようやく後藤宙外「御信心」が発表されはじめる。

これは、当初の「社告」には記されていない予定外の作品で、掲載に先立ち、紅葉は「後藤宙外君は、吾が藻社一列の篤く交りて、素に兄事する所也。君換菓篇の挙有るを聞くや、則ち諸生と愛を同うして、懇に枕上一篇の贈を賜ふ」と、謝意を込めた異例の序文を草している。「日録」六月十八日条に「鏡花生来り、宙外氏より寄贈せる換菓篇「御信心」の一篇を持来る」、二十七日条には「換菓篇宙外氏の御信心の引を草す」とあるように、この作品が二ヶ月以上前に書き上げられたことは明白だが、門下生とは別格の扱いをし、

『換菓篇』シリーズ掉尾を飾るものとして公表を意図した紅葉の手により、これまで伏せられていたものであろう。しかし、風葉の度重なる休載という蹟きの後、一ヶ月に亘って他の門下生の作品発表もなく、やむなく、この「御信心」が「換菓篇の殿として」八月二十八日まで連載されることになるのである。完成稿のため、新聞社としては安心して掲載できただろうが、当初、十六作を予告したにもかかわらず、結局、鏡花・秋声・風葉・宙外、計四作のみで打ち切りとなった『換菓篇』シリーズは、企画倒れに終わった印象が強い。

この後、単行本としての企画は進行し、「日録」十月二日条には「博文館内山氏雨中来訪、換菓篇表紙の件」と記され、十月二十四日付で刊行に及んでいる。<sup>④</sup>紅葉はこの日付の六日後、十月三十日に死去しており、辛うじて生前の紅葉に奉ずることができたわけである。なお、単行本「換菓篇」には、「二六新報」予告時の作家名・作品名との異同が多いので、蛇足ながら次に一覧表を掲げておく。

	「二六新報」 社告		「二六新報」 掲載		単行本「換菓篇」 収録
鏡花	藁	草	取	藁	草
秋声	ゆ	く	雲	ゆ	く
春葉	旅	鞆			
風葉	湯	の	花	手	梛
				足	桎
					宇宙の目的 (「手梛足桎」改題)
					出獄 (「ゆく雲」改題)

白峯	花見車		
斜汀	貝ひろひ		
春鴻	片思		
苔花	馬		
嶺葉	うまず女		
夏葉	公用		
西男	かへり路		
水葉	内科九号室		
吟葉	友		
春石	秋の影		
流霞	新緑		
麦人	赤つばき		
宙外	御信心		
雨泉	幻異燈形		
		四季五十二句	花見車
		四季十三句	
		靈薬	
		世相	
		入営祝	
		公用	
		青切符	
		馬	

さて、刊行後の書評では、「帝國文学」の「吾人はこの美筆を讀たへ其師弟情誼の敦厚なるに感ずること深し」に代表される好意的な批評が主流を占めるが、文豪尾崎紅葉に対する弔意からか、内容に踏込んだ細評は見当たらない。そんな中で、「文庫」が「所謂門

下一列の中に、春葉荷葉の二子が見えない」ことを「兎に角物足らぬ」<sup>⑦</sup>としている評や、「中学世界」が「孰れも熱誠の籠らざるなし、中に就て鏡花氏の『葉草取』風葉氏の『宇宙の目的』秋声氏の『出獄』宙外氏の『御信心』は殊に見るべきものなり」<sup>⑧</sup>と作品名を挙げている評が眼をひく。四作はいずれも「二六新報」紙上からの収録であり、もしこの批評を信じて極論すれば、他作品は間に合わせ的なものと考えられないこともない。実際、星野麦人や北島春石は当初の予定を変え、「四季五十二句」「四季十三句」でお茶を濁し、柳川春葉・泉斜汀・原口春鴻・高山流霞に至っては、作品すら発表していない。

『換葉篇』は明治三十六年三月末に企画され、一部の新聞掲載を経て十月末に単行出版されたが、全体としては拙速が目立ち、必ずしも充実したものとはいえない。その中にある鏡花の「葉草取」は、秋声・宙外らの作と共に良質なものと考えてよいだろう。

## 二

「葉草取」は「二六新報」を初出とし、『換葉篇』に収録された後、『鏡花双紙』（大5・1）に再録される。自筆原稿が慶応義塾図書館に収められていることは有名だが、同館蔵「泉鏡花自筆原稿目録」<sup>⑨</sup>によると、署名はなく、後半三分の一ほどが欠丁になっている

由である。これとは別に、天理図書館には全編を完備した「葉草取」自筆原稿が所蔵されている。同館の御厚意によって、閲覧することができたので、以下に気がついたことを報告する。

慶応蔵原稿とは異なり、天理蔵原稿には版組み指定や「鏡花泉鏡太郎」との署名があるので、こちらが「二六新報」掲載用原稿であることはほぼ間違いない。「和判紙に毛筆墨書されたもので、新聞一回分は四枚の割。今は改装、卷子本として伝は<sup>⑩</sup>」り、全五十六枚、本文は総ルビ、題名には「くすりとり」とルビが付されている。章立ては「第一」から「第十四」。そのうち「第九」までは慶応蔵原稿と同じだが、以下、岩波新版『鏡花全集巻七』六一五頁六行目「高坂は打案じ」の前に「第十」。六一八頁一行目「五」は「第十一」。六二〇頁一五行目「何うも身に染むお話」の前に「第十二」。六二三頁一四行目「蕪の高い葉を噛んで」の前に「第十三」。六二六頁三行目「丈より高い茅萱を潜つて」の前に「第十四」。——と区分されている。これは新聞発表と一致する。また、慶応蔵原稿では記されない、全集本五九五頁五行目「慧雲含潤」以下の経文も天理蔵原稿では記されており、慶応蔵で異同のある六〇八頁六行目以下の一節は、天理蔵では「ことく」が「コトく」と表記されている以外、全集本との異同はない。ただし、「コトく踏んで」につづく箇所では「不図唄つたのが猿が三疋と言ふ、」と一旦記された後、抹消さ

れた跡がある。同じく、歌詞中「住みやる」の部分には、「住んで」と記されて後の抹消がみえる。

このように、天理蔵原稿と初出紙はほぼ一致しているが、次に成立上の問題点をいくつかとりあげたい。まず題名の読み方だが、前に記したように、天理蔵原稿では「くすりとり」、「二六新報」掲載第一回も同じく「くすりとり」とルビが付され、第二回以降で「やくさうとり」と改められている。ところで、春陽堂版『鏡花全集巻五』（大15・7）口絵に写真版で掲載された尾崎紅葉の手による添削をみると、「二六新報」紙に「やくさうとり」と朱筆で書込まれている。つまり、読み方の訂正は師紅葉の意向を遵守した結果だったわけである。早くも第二回から改められていることを考えると、鏡花が紅葉の病床に第一回を献じたのは掲載当日であり、紅葉も即座に朱を入れ、鏡花はその日のうちに新聞社へ訂正を連絡した模様である。口絵掲載分しか比較していないが、その限りにおいて、鏡花は単行本『換葉篇』収録時に、句読点のつけ方に至るまでことごとく紅葉の指示どおりに訂正している。「婦人」を「女」に、「朱唇」を「唇」に訂正するなど、個性を減殺するきらいがあるにもかかわらず、作家として独り立ちしたこの時期に至っても、鏡花は紅葉の指導を全面的に受け入れていたのである。

原稿の推敲に関しては、「大凡、草稿本文を省略（削除）するこ

とによって文章を凝縮し、当初冗長にみえた文体を引きしまった鏡花独自の文体に整えて行く例が多く見られる」<sup>⑮</sup>のは、天理蔵原稿の場合も同様である。例をあげれば、「有明に露を帯びた淋しい朝顔の色」を部分的に抹消して、「露の朝顔の色」(岩波全集本五九一頁四行目)に訂正、「高坂はきつくと布を断つが如き音を聞いて、」の「きつくと」を抹消(同六二〇頁五行目)、「高坂は声が曇つて目がうるんだのである」を半分削り、「高坂は声も曇つて、」(同六二四頁八行目)に訂正等、随所にみられる。

一方、挿入された文章も散見する。(Ⅰ)「煩い町方から逃げて来て、遊んで居るのでございませう。それとも」(全集本五九七頁五行目)、(Ⅱ)「慄然として」(同六二〇頁二〇行目)、(Ⅲ)「合掌して、」(同六二八頁一一行目)等である。これらは、原稿では行間に挿入符号を用いて書かれている。(Ⅰ)は医王山中に散る桜の花片の形容であり、この地が反俗の別世界であることを強調する役割を果たしている。(Ⅱ)は高坂がかつて自分を導いてくれた娘の話をするうちに、今、眼前に行く花売の姿が二重写しになった驚きを表わし、(Ⅲ)は作品末尾、消えた花売の面影を追慕する場面で、高坂の花売に対する熱い心情を表わすために挿入されたものである。これらは一例にすぎないが、鏡花の文章表現に対するなみなみならぬ執着を看取することができる。

最後に、内容に関わる推敲の跡をとりあげたい。全集本六〇八頁一行目、

何となく心に浮んだは、あゝ、向うの山から、月影に見ても色の紅な花を採つて来て、それを母親の髪に挿したら、屹度病気が復るに違ひないと言ふ事です。又母は、其の花を簪にしても似合ふくらゐ若かつたですな。」

につづく部分で、

よしんば手向けるにした処で、月夜に色の鮮麗な花なら、冥土からも見えませうと思込んで、(△)△は並べて記されている表現を示す。——引用者注)

の一文を抹消した跡がある。これは少年高坂が母の死を予期している文章であり、その不吉さゆえに抹消されたものであらう。しかし、冥土から見える紅の花という印象は清新で、後の「草迷宮」(明41・1)において、明の母親が天宮から、下界で眠る我が子をみつめる場面のイメージともつながりそうである。

また、少年高坂が失踪してから帰宅するまで「丁度全三月経つたです。」(全集本六二四頁一一行目)とする文の直前に「四月はじめから六月の末」の一文が抹消された跡があるが、これは六月十五日九歳の誕生日に失踪したとする記述(同六〇四頁八行目)と矛盾することに気づいての処置であつたらう。つづいて、少年高坂が持帰

った紅の「花を枕頭<sup>まくらもと</sup>に差置くと、其の時も絶え入つて居た母は、呼吸<sup>き</sup>を返して、それから日増に快<sup>よ</sup>くなつて、五年経つてから亡くなりました。」(同六二四頁一二行目)と記される文章のうち、「五年」は当初「十五年」と記されていた跡があり、恩人の娘を捕えた山賊が隣家に入つた時期も「其頃」(同六二五頁一行目)ではなく、「近頃」と書かれて後訂正されている。「十五年」とすると、高坂が二十四歳の時に母が死去した計算となり、「母が亡<sup>な</sup>くなりました翌年」から、東京へ修行に参つて、国へ帰つたのは漸<sup>おそ</sup>と昨年。」(同六二五頁一二行目)と話す医科大学生高坂光行の言動と合わなくなってしまう。常識的に考えて大学入学は二十歳前後であるはずで、二十五歳で上京したのでは遅きに失するのではなかろうか。<sup>⑭</sup>

ところで、鏡花の母が亡くなったのは明治十五年、鏡花満年齢九歳の年にあたり、少年高坂が医王山中に分け入つた年齢と一致している。その意味では、高坂には幼い日の鏡花自身の思いが投影されていると考えてよく、はじめ「十五年」と記したのは、せめて作中では母を長生きさせたいと願つた結果ではなかったろうか。つけ加えれば、高坂を医科大学に進ませたのも、母を病から救えなかったことへの悔恨が反映されているのかもしれない。しかし、母の命を「十五年」も延ばすと、高坂上京時に無理が生じるためやむなく「五年」に訂正したのが実情であつたらう。ここには、鏡花の亡母

に対する追慕、それに加えて病床にある師紅葉の長生への願いが込められていたのである。

他にも推敲の跡は多く、とりわけ原稿区分での「第十」以降には顯著にみられるが、墨黒々と抹消されているうえに、卷子仕立てに表装されているため、判読できないのが残念である。いずれにせよ、鏡花が推敲を重ねて原稿を書き、初出紙を紅葉に見せ、その添削をもとに再度訂正を加えるという過程を経て、単行本『換葉篇』に収録された「藥草取」は、鏡花にとって思い入れの深い力作であつたといえるだろう。

### 三

この作品は「神韻縹渺とした詩趣を横溢させた名品」<sup>⑮</sup>と称えられ、「複式夢幻能との類似」<sup>⑯</sup>が夙に指摘されてきた。私もそれに賛同するものだが、医王山という舞台、作中で引用される経文やわらべうた、彼の地に伝わる花売風俗等について、私見を加えておきたい。

医王山は、『加能郷土辞彙』に「河北郡の東南二侯領で、越中の境上に立つ。(略)海拔九三九米。郡中第一の高峰で、山麓大菱池から上るを普通とする。金沢人はこの医王山を奥医王といひ、その北に連る白兀山・黒滝山付近を概して医王山とする」<sup>⑰</sup>と記される山で、『加越能大路水経』には「山上に薬師有り、故に名とす」<sup>⑱</sup>と、

山名の由来が明らかにされている。今日でも「山中に薬草の種類、量が多い」<sup>⑮</sup>この山は、「薬草取」の舞台にふさわしい。師の病床に呈する作品を考えた時、故郷にある薬草茂る山、医王山を懐かしく思い浮かべたことは自然の成り行きであった。

ところで、医王山には数々の伝説が伝わっている。最も有名なものは『白山禅頂私記』<sup>⑯</sup>が伝える泰澄大師伝説である。白山の開山泰澄は、以前「加賀ノ国医王山の巖窟」で「只一人観念シテ日ヲヲク」っていたが、その時、能登島から「臥ノ行者」という沙弥が訪れ、飛鉢の奇蹟をみせる。後に泰澄は臥行者・淨定行者を従えて白山に移るわけだが、医王山での修行時代があったことは有名である。もっとも、この話は越前国越知山での出来事を加賀におきかえて流布させたものらしい。これには、信仰の中心地たる白山の登山口が「越前馬場、加賀馬場、美濃馬場の三カ所にわかれて」おり、「三馬場の間で激しい競争がおこり、神山を血でけがす」ことすら起きたという背景が関わっている。つまり、加賀馬場の正統性を宣伝するための方策として、地名のおきかえが行なわれたわけである。話の真実はともかく、広く宣伝されたことは確実で、当然鏡花もこの話を知っていたはずだが、「薬草取」の中では全くふれていない。

また、鏡花が愛読した『三州奇談』には、医王山の話として「金

茎の溪草」<sup>⑰</sup>が収められている。山中で道に迷った武士が、何げなく手にした山葵を宿へ持帰り、夕飯の仕度にしりおろそうとすると、あまりに堅いので「能く見れば、此わさび茎も葉も皆黄金」であったという話である。「金茎の溪草」は「遠野の奇聞」（明43・9、11）でも言及され、鏡花も愛着を抱いていたはずだが、これも「薬草取」ではふれていない。他にも山中の大池に伝わる大蛇伝説<sup>⑱</sup>など、数々の不思議な話が伝えられる医王山だが、鏡花はこの神秘的な山を舞台として選びながら、複雑な伝説を切り捨て、薬草探索行に的を絞ったわけである。

探索行は青年高坂が山中で美女に出会うところから始まるが、この女性を花売と設定したことには理由がある。実弟泉斜汀は「金沢風俗」<sup>⑲</sup>で、その地の花売風俗をのべている。

部でも彼の花屋と云ふものは、余程風情のある者だが、別けて金沢の花売は、女だけに風情が多い。（略）姿は皆一様で、目倉の折目正しい衣服に、黒天鵝絨の帯、裾を端折り、目倉の脚絆草靴で、晴雨に関らず平たい菅の笠を被り、重くはない草の花を箆に入れて天秤で肩に掛け、又は小さな筵に包んで、其の儘担いで来るのもあり。

この記述と、「薬草取」の

女の其の雪のやうな耳許から、下膨れの頬に掛けて、柔に、濃

い浅葱の紐を結んだのが、露の朝顔の色を宿して、加賀笠といふ、縁の深いので眉を隠した、背には花籠、脚に脚絆、身輕に扮装<sup>いでた</sup>つたが、艶麗<sup>あでやか</sup>な姿を眺めた。

## (一)

という描写はよく似ている。さらに、斜汀は花売の出所を「浅野川の上、向山の麓村で、若松と云ふ処」と記しているが、『亀の尾の記』によると、この「若松は二俣辺までも郷名とす」<sup>㉞</sup>とのことであり、「藥草取」の花売が住居を問われて、「はい、二俣村でございます」(一)と答えることまで一致している。二俣は医王山麓にある花売の出所であった。金沢の花売が山中まで採集に出かけた確証はないが、鏡花は幼い頃、毎朝医王山の方角からやってくる、やさしげな女の花売姿を目にし、一種、憧憬に近い感情を抱いていたのではないか。医王山と花売は、鏡花の意識の中では不可分のものだったはずである。

## 四

一方、高坂は医学生ながら経文を説誦する、いっぶう変わった性格を与えられている。この経文は最初から構想にあつたらしく、作品に引用する一節の読み方を尋ねた吉田賢竜宛書簡下書<sup>㉞</sup>が残っている。鏡花は経文の一節を抜書した後、

右此度先生の病床に献し候一篇の中に抄出したし候がちやん

と読め申さずなにとぞかなをおんつけ遊ばし下され度恐入候へどもすぐにおん願ひ申上候

と記している。賢竜からの返信の有無は不明であり、鏡花自身も訓読を試みた形跡があるが、結局、作中では音読に統一されている。訓読挫折の結果とも考えられるが、後の談話「おぼけずきのいはれ少々と処女作」(明40・5)で、経文を読誦する際には音読法を用いると明言し、その理由として、「僕には観音経の文句——なほ一層適切に云へば文句の調子——其ものが難有いのであつて、その現してある文句が何事を意味しようとも、そんな事には少しも關係を有たぬのである」とのべていることから判断すると、鏡花の信念でもあったようである。

「藥草取」に抄出された経文は「妙法蓮華經藥草喻品」(一)である。『国訳一切経』に収められた馬田行啓氏の「解題」<sup>㉞</sup>によると、法華経の漢訳は正法華経・妙法蓮華経・添品妙法蓮華経の三本が現存し、「三訳の中、支那、日本等に於て専ら行はれたのは什訳の妙法華で、他の二訳は唯だ妙法華の比較研究資料たるに過ぎない」ということである。『大正新修大藏経』<sup>㉞</sup>所収の本文で比較しても、「藥草取」抄出本文と一致するのは妙法蓮華経であり、鏡花もこれを使ったと考えてよい。

「妙法蓮華経」のうち、「藥草喻品」は「仏が摩訶迦葉等の大弟

子のために、更に一の譬喩を以て仏の平等なる慈悲と救済とを宣説せられたもの」で、鏡花が引いたのは釈迦が偈を説きはじめた前半部分である。該当箇所を馬田氏の訓読で示せば次のようになる。

慧雲潤を含み 電光晃り曜き 雷声遠く震ひて 衆をして悦ませしめ 日光を掩ひ蔽して 地上を清涼にし 雲鬘垂布して承攬すべきが如し 其の雨普等にして 四方俱に下り 流樹すること無量にして 率土充ち洽ふ 山川陰谷の 幽邃に生ひたる所の 卉木藥艸 大小の諸樹 百穀苗稼 甘蔗葡萄 雨の潤す所 豊かに足らざること無く 乾地普く洽ひ 藥木並に茂り其の雲より出づる所の 一味の水に

この部分の直前に「迦葉当に知るべし 譬へば大雲の 世間に起つて 偏く一切を覆ひ」(傍点引用者)の一節があるように、あくまでも比喩として自然が語られていることに注意したい。いわゆる「三草二木の譬」にあたり、仏の慈悲の平等を説くことが主であり、藥草は、大小諸樹・百穀苗稼等と並列されたひとつの比喩にすぎない。偈の後半では、小さな藥草とは「涅槃に到達している人たち」の、中位の藥草とは「半ば淨らかな覺知のある人たち」の、そして、最高の藥草とは「精進努力と禪定を行なう人たち」の謂であると比喩の内容が説き明かされている。

しかし、鏡花はそのような意味で作中に抄出したわけではないだ

ろう。「観音經を誦するも敢て箇中の真意を闡明しようといふやうなことは、未だ嘗て考へ企てたことがない」(「おぼけずきのいはれ少々と処女作」)鏡花は、「藥草、喩品」という名称や經文各語の印象から、これを作品に用いたものと考えられる。「日光掩蔽 地上清涼」「山川陰谷 幽邃所生」等の語は、清浄な医王山の雰囲氣にふさわしい。つまり、鏡花は「藥草、喩品」を仏法の比喩としてではなく、現実の自然描写として受取り活用したのである。そして青年高坂は、医王山中でその場にふさわしい情景を記した經文を誦することによって、花売と出会い美女ヶ原へと導かれるのである。

## 五

青年高坂が美女ヶ原に導かれる契機となったものが「藥草、喩品」であるのなら、少年高坂の場合、その役割を果たしたのは「花折りに」のわらべうたであった。

向の山に、猿が三疋住みやる。中の小猿が、能う物饒舌る。

何と小児等花折りに行くまいか。今日の寒いに何の花折りに。

牡丹、芍薬、菊の花折りに。

(三)

これは、すでに小林輝治氏が『金沢のわらべ唄と民謡』で紹介したその地に伝わる子守唄であり、同氏は別の論考で柳田国男の所説を援用し、作中での役割を明らかにしている。全国的にみても、唄は

その後山中の宿で若く美しい女性と出会う空想が多く、「薬草取」の少年高坂も同じ体験をし、「最後には泊められた家で会う『世にも綺麗な娘』のお蔭で、唄の中の芍薬の花を持ち帰り、母の髪に挿し病氣も直った」。本作でのわらべうたの役割はここに尽きている。

ほんの少し付け加えれば、柳田は「折るといふ楽しみの考へられる植物、さうで無ければ名ばかり聴いて居て、有るなら見たいと思ふやうな花の種類」が歌われたとしているが、金沢の場合、牡丹・芍薬・菊という、いずれも薬用植物が選ばれている事実注目したい。たとえば『農業全書』<sup>37)</sup>では、牡丹・芍薬を「薬種類」の部に収め、牡丹は「根をとり薬種とし、尤良薬にて多く用ゆる物なり」、芍薬は「薬種には花の一重なるを用ゆ」と記されている。『大和本草』<sup>38)</sup>にも同様の記述が見いだせるが、菊の項では「ひとへなる黄花に優れて甘き菊あり。是薬に用る真菊なるべし」と記されている。

「花折りに」は薬草を求める山行を暗示した歌だったのである。少年高坂が「彼が医王山と見て居る内に」「不図」(三)歌いだしたことは象徴的であろう。薬草生い茂る医王山に、少年高坂は「花折りに」を、青年高坂は「薬草喻品」をと、いずれも薬草採集に縁のある歌を歌い、経文を誦することによって山中の美女に出会い、導かれて美女ヶ原へ到達するのである。

そこは四季の花が一時に咲く夢幻境であり、男を救済する永遠の

女人が生息する空間であった。少年高坂にとって、衣類を奪う「親仁」や不潔な豆腐を振舞う「黒婆」(四)のいる魔所を通過しなければ到達できない異界であったことは当然だが、青年高坂にとっても異界である事情に変わりはない。

今ちや、三里ばかり向うを汽車が素通りにして行くやうになつたから、人通もなし。大方、其の馬士<sup>まじ</sup>も、老人<sup>としやう</sup>も、最も此の世の者ぢやあるまいと思ふ、私は何だか其の人達の、那<sup>あ</sup>のまゝ影を埋めた、丁ど其の上を、(略)貴女<sup>あなた</sup>と二人で歩行<sup>ある</sup>いて居るやうに思ふですがね。

(四)

『『鉄道敷設法』』によって建設を開始した北陸線は、(略)明治三十年九月二十日小松まで、三十一年四月一日金沢まで、三十一年十一月一日高岡まで<sup>39)</sup>延びている。「薬草取」の作中時間は不明瞭だが、作品執筆時の明治三十六年と仮定すると、確かに高坂の少年時代には鉄道未開通であった計算になる。鏡花が序文を寄せた「諸国童謡大全」<sup>40)</sup>には、敦賀から富山までの地名が詠み込まれた「北陸鉄道レールエ節」が収録され、「ホントニ喜ばしき近きにや」の一節があるなど、開通の喜びが歌われている。中央から延びる鉄道が近代の象徴であるとすれば、医王山への道は、鉄道が素通りしたために取り残され寂れた地域であり、反近代の磁場であるといつてよい。そして、少年時に出会った人々が眠る、いわば墓原の上を歩いた末に

ようやく到達できる異界が医王山美女ヶ原であった。

そこは、少年の日には「凡そ山の中を二日も三日も歩行かなければならない」(二)とこゝろであり、青年となった今は「日一杯に里まで帰る」(同)ことが可能な場所でもある。もちろん、これは娘や花売の導きをうけての話であるが、いずれにしても現実の時間の觀念が空無化された界域であることは間違いない。その地に到れば大切な人の病を癒やすことができる。鏡花はそんな夢を紡ぎ、師紅葉の快復への願いと亡母に対する哀惜の氣持を込めて、「菓草取」一編を書上げたのである。

# (注)

- ① 岡保生「尾崎紅葉年譜」(『尾崎紅葉の生涯と文学』所収、二八四頁、昭43・10・30、明治書院)
- ② 尾崎紅葉「十萬堂日録其四」(『尾崎紅葉全集第九卷』所収、二四六～三四〇頁、昭17・9・15、中央公論社)
- ③ 休載日は、六月二十日・二十四日・二十六・二十八日・三十日、七月三・八日・十日・十二・十五日・十七日である。休載は多いが、ともかく作品としては完結しており、初出紙と『換葉篇』収録本文との異同は少ない。岡保生『評伝小栗風葉』Ⅳ・活躍期、一二〇頁、(昭50・10・25、桜楓社)、近藤恒次『小栗風葉書誌』第二部・風葉の全著作、四五・四六頁、(昭50・12・10、豊橋文化協会)両氏が、「手楷足程」は、中途未完だったので、『宇宙の目的』と改題、完結したものを『換葉篇』に収めた(岡保生とするのは何かの間違いではなからうか)。
- ④ 無署名「予告」(『二六新報』明36・8・21)

## 鏡花「菓草取」覚書

⑤ ただし、管見に入った後版(四版・五版・六版その他)の奥付には、初版発行日として「明治三十六年十一月一日発行」と記されている。十一月一日付「二六新報」の記事「尾崎紅葉氏逝く」には、「換葉篇は去廿八日製本成りて氏の枕頭に供へられたり氏は愛撫子の如く略見舞の人に手づから本を抽きて」与えた旨が記されているが、十一月一日発行とすると、紅葉没後の出版となってしまう。初版刊記が改変された理由がよく分からない。

- ⑥ 無署名「八批評／換葉篇」(『帝国文学』9・12、明36・12・10)
- ⑦ 白蓮「八新刊紹介／換葉篇」(『文庫』24・6、明36・12・15)
- ⑧ 無署名「八新刊紹介／換葉篇」(『中学世界』6・14、明36・11・10)
- ⑨ 檜谷昭彦「泉鏡花自筆原稿目録慶応義塾図書館蔵」(『鏡花全集別巻』所収、六六七頁、昭51・3・26、岩波書店)
- ⑩ 天理図書館編「八善本写真集七／近代作家原稿集」八・菓草取 泉鏡花、八頁、(昭31・7・15、天理大学出版部)。同書には第一丁のみ写真掲載されている。
- ⑪ 慶応蔵原稿では「□さうとり」となっている由だが、判読不明が一字分であり、「さう」と「すり」は草書体で書くときと似てくるので、これも「くすりとり」と読むべきではないか。実見の機を得て確認したい。
- ⑫ ただし、「俯向いて」は、紅葉の添作を容れて『換葉篇』「鏡花双紙」で「内向いて」と訂正されたが、春陽堂版全集では「俯向いて」に戻されている。
- ⑬ 檜谷昭彦前掲「泉鏡花自筆原稿目録」「解題」、六三〇頁。
- ⑭ ただし、「菓草」を採つたのは、もう二十年、十年が昔、ざつと二昔も前になるです(三)との記述から判断すると、青年高坂は二十九歳であり、数字上の矛盾はない。
- ⑮ 村松定孝『泉鏡花研究』第四章・鏡花小説鑑賞十夜、二四九頁、(昭49

- ・ 8・30、冬樹社)
- ①6 脇明子『幻想の論理——泉鏡花の世界』1…物語世界の創造、六六頁、(昭49・4・20、講談社)
- ①7 日置謙編『改訂増補加能郷土辞彙』『医王山』の項、三三頁、(昭31・8・1、北国新聞社)
- ①8 大沢君山『重修加越能大路水経』巻上…加賀八川「森下川」の項、一頁、(昭6・12・25初版未見、昭45・9・1復刻、石川県図書館協会、本書成立は享保二十一年。)
- ①9 竹内理三編『角川日本地名大辞典17石川県』『医王山』の項、九〇頁、(昭56・7・8、角川書店)
- ②0 権大僧都勝慶『白山禪頂私記』(日置謙編『白山比咩神社文獻集』所収、一一八～一二〇頁、昭10・6・25初版未見、昭46・9・1復刻、石川県図書館協会、本書成立は永正六年以前。)
- ②1 広瀬誠『靈山をめぐるみにくい争い——三つの馬場と二つの峠』(『立山と白山——その歴史・伝説・文学』所収、一一六頁、昭46・2・1、北国出版社)
- ②2 堀麦水『三州奇談』巻之二「金茎の溪草」の項、五五～五六頁、(昭8・4・15初版未見、昭47・6・1復刻、石川県図書館協会、本書成立は天明三年以前。)
- ②3 藤島秀隆監修『金沢の昔話と伝説』233…医王山の池の大蛇、一七七～一七八頁、(昭56・3・31、金沢市教育委員会)
- ②4 泉斜汀『金沢風俗』(『新小説』6—2、明34・2・1)
- ②5 平瀬徹斎『日本山海名物図会』巻之四「加賀笠」の項には、「菅笠国々よりおおく出れども、中にも加賀を上品とす」(千葉徳爾編『日本山海名産名物図会』所収、二六一頁、昭45・6・30、社会思想社)と記されている。なお、本書成立は宝暦四年。
- ②6 柴野美啓『亀の尾の記』巻十一「若松村・鈴見村」の項、一二八頁、(昭7・2・15初版未見、昭46・2・25復刻、石川県図書館協会、本書成立は弘化四年以前。)
- ②7 『書簡下書9』(前掲『鏡花全集別巻』所収、三六一～三六二頁)
- ②8 馬田行啓『妙法蓮華経解題』(岩野真雄編『国訳一切経印度撰述部』所収、一～二頁、昭3・12・26、大東出版社)
- ②9 鳩摩羅什訳『妙法蓮華経卷第三葉草喻品第五』(大正新修大藏経第九巻)所収、一九～二〇頁、大14・7・15、大正一切経刊行会)
- ③0 馬田行啓前掲『解題』一七頁。
- ③1 項末なことだが、『鏡花全集』で「妙法蓮華経葉草諭品、第五偈の半」とされているのはおかしく、本来、『妙法蓮華経葉草諭品第五、偈の半』とすべきところである。自筆原稿・初出紙・「換葉篇」いずれも正しい位置に読点があるが、『鏡花双紙』収録の際に移動し、以降、それに倣っている。
- ③2 馬場行啓訳『妙法蓮華経卷の第三葉草諭品第五』(前掲『国訳一切経』所収、七六頁)
- ③3 松濤誠廉・長尾雅人・丹治昭義共訳『大乗仏典第四卷法華経』第五章…葉草の喩え、一五三～一五四頁、(昭50・11・25、中央公論社)
- ③4 小林輝治監修『金沢のわらべ唄と民謡』わらべ唄10…子守唄、一四五～一四八頁、(昭56・3・31、金沢市教育委員会)
- ③5 小林輝治「鏡花における『自然と民謡』の問題」(福井大学「国語国文学」19、昭51・5・25)
- ③6 柳田国男「鹿角部の童謡」(『定本柳田国男集第十七巻』所収、二二〇～二三一頁、昭37・6・25、筑摩書房)
- ③7 宮崎安貞『農業全書』巻之十…生類養法葉種類、三三六～三三八頁、(昭11・1・10、岩波書店、本書成立は元禄十年。)

- ③⑧ 貝原益軒『大和本草』巻之七…花草類、『益軒全集』巻之六所収、一六一～一六三頁、昭48・5・5、国書刊行会）、本書成立は宝永六年。
- ③⑨ 日本国有鉄道編『日本国有鉄道百年史第三巻』第二編…幹線伸長時代、二五頁、（昭46・8・30、日本国有鉄道）
- ④⑩ 作中、「未だ邏卒といつた時分」（五）、山賊の隠れ家が包囲されたと記されるが、地方の府県でも明治「八年十月従前の称呼をすべて巡査に改め」「坂本政親「巡査」「解釈と鑑賞」33―2、昭43・1・5）」っており、この点から考えると、高坂の少年時は八年以前となる。すると青年時は三十年以前の計算となり、鉄道開通時との矛盾が生じる。庶民の間では、後まで「邏卒」の称呼が残っていたと解するべきだろうか。
- ④⑪ 「北陸鉄道ルールエ節」（童謡研究会編『諸国童謡大全』所収、六六二～六六七頁、明42・9・15、春陽堂）
- ④⑫ この年の鏡花には、私鉄廃駅を舞台とした「二世の契」（明36・1）や、北陸鉄道工事に因んだ「風流線」正・続（明36・10）明37・10）等、鉄道に関わる作品が目だつ。

〔付記〕

本稿での鏡花作品の引用は、特記したものを除き、岩波新版『鏡花全集』全二十八巻・別巻一（昭48・11・2）昭51・3・26）を底本とする。ルビを簡略化し、漢字は原則として新字体に改めた。なお、自筆原稿の調査に際しては天理図書館の、『換葉篇』初版本については池田文庫の、格別の御厚意をいただいた。深く感謝したい。